

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳についての断章

山岡洋一

#### - 完全原稿

たいていの翻訳家は完全原稿をださない。たいていの翻訳家がだすのは、  
いってみれば不完全原稿なのだ。では、不完全原稿をだれがどうやって完成さ  
せるのか。

### 名訳

津森優子

#### - 大島かおり訳『モモ』

ミヒヤエル・エンデの名作『モモ』の日本語訳は、英語訳に勝る名訳だ。大  
島かおりの洗練された訳を原文と比較する。

### 名訳

須藤朱美

#### - 岸本佐知子訳『中二階』

能が幻の世界をこの世に現すように、遠く離れた外国の日常を日本人に伝え  
る名訳。破綻のない、水晶玉のような訳文を紹介する。

### ひとさまの誤訳(第6回)

柴田耕太郎

#### - 『二ホン語、話せますか?』(マーク・ピーターセン著、新潮社)

外国語を学ぶときは理屈と文法から入るのが王道だ。「英語ネイティブなら  
こう感じる」ではなく、どうしてそう感じるのか論理的分析が必要だ。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 完全原稿

「あの人はめずらしく完全原稿をだしてくれるから、手を入れる必要がない。編集者としてはありがたい翻訳家だね」。親しい編集者がある翻訳家について、こんな意見を聞かせてくれた。そうか、完全原稿か。

産業翻訳から出版翻訳への転身をはかろうとしていたころ、いくつも驚く点があったが、そのひとつが「完全原稿」という言葉だった。それってどこがおかしいのだろうか。たとえばパソコンを買う前に、くわしい人に意見を聞くとする。何々社のパソコンを買おうと思うんですが、どうでしょう……。うん、そこはめずらしい会社でね、完全製品を売っているから、買った後であちこち修理する手間が省ける。ユーザーとしてはありがたいメーカーだね……。

プロである以上、完全原稿をだすように努力するのは当たり前だ。校正で赤がひとつも入らない原稿、誤訳も訳抜けもない原稿、1字も訂正しないまま印刷され、出版されても恥ずかしくない原稿、だれの目にも完璧だとうつつる原稿。プロである以上、これが理想だ。ピッチャーでいえば、81球で27三振をとるのが理想だ。そう、あのシド・フィンチのように。捕手の方にはご迷惑をおかけしますが、野手の方は守備位置で座ってみていてくださいね……。

もちろん、出版翻訳の場合には産業翻訳とは違って、ゲラというありがたい仕組みがある。ゲラで直せばいいと考えるので、原稿のチェックがついおろそかになる。それに、プロの校正者が変換の間違いや表現の間違いなどを指摘してくれる。編集者が誤訳や不適切な表現を指摘してくれる。翻訳出版はそもそも個人では成り立たないものなのだ。翻訳者と編集者、校正者が協力して完成度の高い訳文を作り、装丁家やデザイナー、印刷会社が協力して素晴らしい本を作り、営業や広報、取次や書店が協力して読者に届ける。もちろん、書評家にも活躍していただくし、新聞のコラムやテレビ番組で取り上げてもらうことも重要だ。だいたい、27連続三振で完全試合、そのうえ自分でホームランを1本打てば勝てるなどと考えるのはどうかしている。野球も翻訳出版も、そもそもチームで行うものだ。チーム・プレーが重要なのだ。そういわれる。

チーム・プレー。なんと美しい言葉ではないか。不完全原稿だといわれようが、気にすることはない。編

集者と校正者を信じて、チーム・プレーに徹しているだけなのだから。

野暮なことをいうようだが、出版の世界は本来、そのようにはできていない。翻訳者には完全原稿をだす義務がある。編集者には訳文を修正する責任はない。校正は翻訳者の責任である。これは本当だ。証拠をみせろといわれれば、お見せすることもできる。法律にそう書いてあるのだ。なんで法律の話がでてくるんだと思われるだろうが、編集者（実際には出版社）と翻訳者の関係は、著作権法によって決められている。著作権法によれば、訳者は完全原稿をだす義務を負っており、出版社は訳者の原稿をそのまま出版する義務を負っている。もちろん、編集者や校正者は原稿が出版に適したものになるように、チェックや校正を行う。だが、これは訳者に「協力」するためであり、訳者の了解がなければ、一字一句といえども変更できない。単純な変換ミスを修正する権限すらもっていないし、修正する責任もない。編集者や校正者が翻訳者の了解を得ることなく変更をくわえた場合、著作者人格権を侵害したことになり、翻訳者は出版社に補償を求めることすらできる。初歩的なことだよ、ワトソン君。

しかしこれは、あくまでも本来そうあるべき姿だというだけである。出版翻訳の現実とは違っている。訳者がそのまま印刷にまわしてもいいほど完成度の高い原稿をだすことはめったにないし、ゲラの段階ですら、チェックや校正に全責任を負うことはめったにない。だからこそ、訳文に全責任を負う翻訳家は「めずらしく完全原稿をだしてくれる」といわれる。

逆にいえば、たいていの翻訳家は完全原稿をださない。たいていの翻訳家がだすのは、いってみれば不完全原稿なのだ。では、不完全原稿をだれがどうやって完成させるのか。大きく分けて、3つの場合がある。

第1に、原稿用紙を使っていた世代の翻訳家には、チェックや推敲、校正はゲラになってから行う人が少なくない。手書きの原稿では推敲しても限界があるし、校正をしても意味がないという面がある。ゲラになってはじめて、全体を通読し、修正すべき箇所を修正する。このタイプの翻訳家は不完全原稿を完全な本にすることに全責任を負う。だから、原稿段階で不完全であるのは恥ではないし、編集者にとって負担になるこ

とでもない。完全原稿をだす翻訳家と、仕事の進め方が違うだけなのだ。

この種の翻訳家は、いまではきわめて少なくなっているようだ。いまでは、原稿用紙をまったく使わず、はじめからワープロを使って翻訳を進める人が大部分だし、手書きで翻訳を進める人でも、その後にワープロで入力する。このようにすれば、ゲラとほとんど変わらないプリントアウトができる（その気になれば、そのまま印刷できる形にすることだってできる）。だから、チェックや推敲、校正はゲラまで待たなくても、プリントアウトで十分に行える。もちろん、プリントアウトで十分に推敲した後、ゲラでもう一度確認するのが最善だが、そうしなければならぬわけではない。原稿用紙を使ったことがない世代なら、プリントアウトでのチェックを重視し、ゲラはあまり重視しないのが自然なように思える。このため、第1の種類の翻訳家は少なくなったようだ。

完全原稿をだす訳者はめずらしいし、ゲラの段階でチェックと校正に全責任を負う翻訳家もめずらしいとすると、大部分の場合、不完全原稿をだれがどうやって完全なものにするのであろうか。第2、第3の場合をみていこう。

第2に、不完全原稿をチェックし訂正し完成させるのが事実上、編集者の役割になっていることが少なくない。原稿をだした段階で自分の仕事は終わったと翻訳者が考えている場合もある。いまの世の中には、思いつきでものをいえば編集者が本にし、印税を振り込んでくれると考えている「著者」もいるのだから、翻訳者が無責任なのは驚くほどのことではないのかもしれない（先生、最近のご著書でこう論じていらっしゃるが、その点について、もう少しくわしくお話いただけますか……。どの本だい、ああそれね、それはまだ読んでいないので、読んだら答えるよ……）。

編集者の立場からは、完全原稿をだせるほどの力のない訳者に翻訳を依頼したのが失敗なのであり、失敗の後始末は自分でつけるしかない。何晩徹夜しようが、大量に訂正して出版できるまでに質を高めなければならない。

だが現実をみると、編集者が訳者の選択に失敗したと決めつけるのは酷な場合も多い。ではだれに依頼すべきだったのかと編集者に質問されたとき、まともに答えられる人はまずいないはずだから。そもそも力のある翻訳家が不足しているのだ。完全原稿をだして

れる翻訳家、原稿は不完全でもゲラで仕上げしてくれる翻訳家は数が少ないので、いつもたくさんの仕事を抱えている。依頼しても断られることが多い。だから、編集者ははじめから半ば諦めている。この翻訳者に依頼すればまともな原稿ができるなどとは思っていない。翻訳者が自信なげであることにも気づいている（力がないうえに自信満々では、とてもじゃないが依頼できない）。たとえば、翻訳者がこう渋る。軽い読み物だというので読んでみましたが、情報技術とか経営とかの話がたくさんでてきて、小説が専門のわたしにはとても理解できない部分もあるのですが……。そこでこう話す。出版というのはチーム・プレーです、情報技術や経営にくわしい編集者が十分にチェックし、問題があったら修正しますから、その点さえ解いたければ、読みやすいこなれた日本語にすることに専念していただきたいと願っていますので……。

こうして、チーム・プレーという美辞麗句に逃げ込み、編集者にお任せし、ゲラが真っ赤になるほど直してもらって、ようやく恥ずかしくない訳書ができあがるのが現実なのだ。だから、著作者人格権など主張できない。主張した場合に恥をかくのは訳者なのだから。それでも、印税だけはしっかりともらう。印税というものは本来、著作者人格権を主張できる完全原稿の対価なのだが。

要するに、完全原稿をだせるほどの力のある翻訳家は圧倒的に不足しているのである。だから、不完全原稿をチェックし訂正し完成させるのが事実上、編集者の役割になっていることが少なくないのだ。

でも不思議ではないだろうか。完全原稿をだせるほどの力のある翻訳家が不足しているとするなら、それは翻訳がきわめてむずかしいからに違いない。だったら、不完全原稿に赤をいれてまともな本にするのも、やはりきわめてむずかしいのではないだろうか。不完全原稿をチェックし訂正し完成させるのが事実上、編集者の役割になっているのだとするなら、翻訳家よりも編集者の方が一般的にはるかに優秀だということなのだろうか。

たしかにそういう場合もないわけではない。簡単な事実をみれば、そういう場合もあるはずだと思える。大手の出版社の場合、編集者は並みの翻訳者とは比較にならないほど所得が多いことが少なくない。世の中の仕組みを考えれば、所得が多い職業に優秀な人が集まるのが当然である。だが、これはごく一部の大手の場合だけであり、一般的には編集者はそれほど所得が

多いわけではない。それに、給料が高い産業に優秀な人が集まるというのなら、銀行にはよほど優秀な人材が集まっているはずではないか。不良債権に苦しむなんてことにはなるはずがない。

それより重要なのは、傍目八目という点だろう。自分の訳文をチェックし修正するのはきわめてむずかしいが、他人の訳文なら比較的容易に問題点を指摘できる。翻訳に真剣に取り組んだことがある人なら気づいているはずだが、翻訳が難しいのは、原文があるからなのだ。原文があるから翻訳は簡単だと考えるのは素人だ。実際には、原文があるから、原文に引きずられる。原文がなければ見事な文章を書ける人でも、原文があるから、ふつうなら考えられないような間違いをする。そして、訳者がそうした間違いに陥ったとき、読者の立場から原稿を読んで問題点を指摘するのは、編集者の本来の役割である。翻訳者と編集者では立場が違い、役割が違うのであり、どちらの方が優秀かという問題ではない。

そうはいつでも、十分な力をもった翻訳家が少なくように、十分な力をもった編集者もそれほど多いわけではない。大量に出版される翻訳書の大部分を訳しているのが力不足の翻訳者だとするのなら、ほんとうに力のある編集者がチェックし訂正できるのは、ごく一部にすぎないはずだ。編集者が忙しすぎて、残りは目をつぶってだすしかない場合が多いはずだ。

それだけではない。力があきらかに不足している編集者がチェックし手を入れたために、翻訳が逆に悪くなる場合もある。そんな例は山ほどみてきた。たとえば原文に in fact とあれば「実際」と訳さなければならぬと思いついて編纂者に悩まされて、本を一冊書いたほどである（『英単語のあぶない常識』ちくま新書）。編集者と対立するのはまずいのだが、やむを得ないこともある。

では、十分な力をもつ編集者がチェックし訂正することができなかった翻訳書や、編集者が手を入れてかえって悪くなった翻訳書の場合、どうなるのか。

第3に、完全原稿をだすだけの力がない訳者が訳し、担当編集者にそれを出版に適した水準まで訂正する時間が能力がない場合、翻訳書はいうならば不完全なまま出版される。この場合、不完全な原稿を完全なものにする役割を担うのは読者である。翻訳書の読者は寛大だ。下手な翻訳にも目をつぶってくれるし、それだけでなく、下手な訳文からでも何とか意味を汲み取っ

てくれる。意味を伝える役割を果たしていない訳文から意味を汲み取ってくれるのだから、不完全な原稿を完全なものにする役割を担っているといえる。

小説でいうと、たとえば日本人作家の小説には不要な登場人物一覧が翻訳書になぜ必要なのか、考えてみたことがあるだろうか。もちろん、片仮名の人名が覚えにくいという問題もある。だが、登場人物一覧を何度も何度もみなければ読み進められないのは、会話の部分の訳が悪くて、登場人物の性格がはっきりと描き分けられていないからであることが少なくない。こういうとき、読者は不完全な原稿を完全なものにする役割を担っているのである。

ノンフィクションの翻訳では、その本でテーマになっている分野について、訳者が関心も知識もなく、わたしの専門は翻訳ですから、専門分野のことは分かりませんといったげな訳文になっていることがある。そういう場合、訳者の知識不足を補う役割は読者が果たしている（あの、先日買った新車なんです、クーラーがよくきかないし、ヘッドライトもついたりつかなくなったりで、電気系統がどうもおかしいのですが……。ご冗談を、お客様、わたしどもは自動車会社ですから、電気のことには分かりません。電気系統の話は電気屋さんに行ってくださいと……）。

そういうわけで、完全原稿をだしてくれる翻訳家はめずらしい。さすがプロだと感嘆する翻訳はめったにない。編集者や校正者が何日も徹夜して努力し、商品として恥ずかしくない水準まで磨かれて出版された翻訳書もそう多くはない。読者が苦勞して読んでいることが少なくない。苦勞なんかしていないという意見もあるだろうが、それは悪訳になれているからだ。翻訳とはこういうものだという諦めがある。そしてたいていの場合は、内容の面白さに目を奪われているからだろう。原作に力があれば、翻訳は下手でも流し読みに耐えられる本になる。再読には耐えられないとしても、流し読みに耐えられる。

こういう翻訳書は本棚に置かれることはない。読み捨てにされる。どこに捨てるのか。資源ゴミになるのでなければ、たとえば新古書店にもっていかれる。本が売れないというときに悪者にされる新古書店には、本があふれている。客も多い。活字離れというがほんとうなのかと聞きたくなるほど多い。

## 大島かおり訳『モモ』

好きな本を一冊だけ挙げると言われたら、私はたぶん『モモ』を選ぶ。ドイツの生んだファンタジーの天才ミヒャエル・エンデによる心躍る物語、豊かな詩情と哲学のにじむ表現、現代社会に警鐘を鳴らす深いテーマ。児童書として扱われ、子供にも無理なく読めるが、大人になって読むといっそう心に響く。嬉しいことにこの本の日本語訳は、自信を持って名訳と言える。翻訳くささを感じさせず、どこまでも自然に物語の世界を描き出し、心地よく読ませてくれる。いったいどんな原文をどう訳しているのか、調べてみる価値はある、そう思わせる文章だ。

原書はもちろんドイツ語。私の専門は英語なので英語版も参照してみたが、残念ながら英語訳はあまりよくなかった。英語の文章としてきちんと成立しているという点では、下手な邦訳本よりよっぽどましなのだが、ずいぶん素っ気なく訳されているし、ところどころに改悪としか思えないような飛躍がある。それに対し、日本語版は原書に勝るとも劣らない表現で、原書の雰囲気を忠実に伝えている。

まず冒頭から見てみよう。

むかし、むかし、人間がまだいまとはまるっきりちがうことばで話していたころにも、あたたかな国々にはもうすでに、りっぱな大都市がありました。そこには王さまや皇帝の宮殿がそびえたち、ひろびろとした大通りや、せまい裏通りや、ごちゃごちゃした露路があり、黄金や大理石の神々の像のある壮麗な寺院が立ち、世界じゅうの品ものがあきなわれるにぎやかな市がひらかれ、人々があつまってはおしゃべりをし、演説をぶち、話に耳をかたむける、うつくしい広場がありました。なかんずく大きな劇場もそういうところにはあったものです。（『モモ』ミヒャエル・エンデ作 大島かおり訳 岩波書店 p.11 注：振り仮名は省略）

語句の並べ方に無理がなく、いくつもの抑揚が折り重なり、音楽のようによどみなく流れている。このリズムのよさは、五七調だとか七五調だとか、単純に分析できるものではない。ともかく読んでいてつかえない文章なのだ。

それに、描写されている情景がありありと目に浮かぶ。古代ローマを思わせる大都市のさまざまな場面が、選びつくされた言葉で語られている。特にうならせるのが「ひろびろとした大通りや、せまい裏通りや、ごちゃごちゃした露路」の部分。原文は breite Strassen,

enge Gassen und winkelige Gaesschen となっている。Strassen は英語の streets、Gassen は alleys にあたり、Gaesschen は Gassen に縮小語尾 chen がついて、little alleys といったところ。少しずつ道幅が狭くなっていくわけだ。独和辞典を引くと、Gasse は「路地、横丁」などと出ているが、それをそのまま使うと、Gaesschen の訳に困る。大島かおりは、そこを「大通り、裏通り、露路」と、あざやかに訳し分けている。「路地」ではなくて「露路」。辞書にはない漢字だが、この方が「道」であることが一目でわかる。

winkelige も訳しにくい言葉だ。「角の多い」という意味で、「曲がりくねった」とでも訳したくなる。英語版も winding と訳している。だが都会の露路は、あまり「くねって」はいない。それより、曲がり角だらけで、ところどころ建物が飛び出てきたりして、迷路のような感じ。「ごちゃごちゃした露路」が、まさにぴったりではないか。また、breite は broad の意味なので、なにも考えずに「広い大通り」と訳してしまいそうだ。だが「大通り」が「広い」のはあたりまえなので、「ひろびろとした大通り」。

「世界じゅうの品ものがあきなわれるにぎやかな市がひらかれ」も、日本語として実に自然だ。ここは da gab es bunte Maerkte, wo Waren aus aller Herren Laender feilgeboten wurden で、英語に直訳すると there were busy markets where goods from all countries were sold となる。「世界じゅうの品ものが売られるにぎやかな市場があり」でも悪くはないが、「あきなわれる」「市がひらかれ」の持つ語感にはとてもかなわない。

翻訳には、原文の表す内容を適確にイメージする力と、それを適切な日本語で表現する力が必要だが、この部分を見ただけでも、大島かおりはどちらもずば抜けていることがわかる。日本語としての語句のつながりに細心の注意が払われているからこそ、すらすらと読める文章になっているのだ。

表記のしかたにも感心してしまう。ひらがなが多く、振り仮名がたくさん振ってあるのは、児童書ならではの特徵だが、漢字と仮名が、実にバランスよく使い分けられている。ざっと文章を眺めると、各場面の核となる言葉だけが漢字で浮かび上がり、視覚的な効果を上げている。一般書ではここまで仮名を多くすることはできないだろうが、学ぶべきところはあるだろう。

こうして物語の導入として、劇場の話がはじまる。導入部をしめくくる次のパラグラフには、演劇の好き

な人なら、思わずうなづくことだろう。

そして、舞台のうえで演じられる悲痛なできごとや、こっけいな事件に聞き入っていると、ふしぎなことに、ただの芝居にすぎない舞台上の人生のほうが、じぶんたちの日常生活よりも真実にちかいのではないかと思えてくるのです。みんなは、このもうひとつの現実に耳をかたむけることを、こよなく愛していました。(p.12)

Und wenn sie den ergreifenden oder auch den komischen Begebenheiten lauschten, die auf der Buehne dargestellt wurden, dann war es ihnen, als ob jenes nur gespielte Leben auf geheimnisvolle Weise wirklicher waere, als ihr eigenes, alltaegliches. Und sie liebten es, auf diese andere Wirklichkeit hinzuhorchen. (原書ハートカフ版 p.8)

この原文を英語に直訳すると、次のようになる。

And when they listened to the gripping or comic incidents which were expressed on the stage, it seemed to them as if those lives which were only played on the stage were in a mysterious way more real than their own everyday lives. And they loved to listen in to this other reality.

虚構のなかにこそ真実がある。舞台のみならず、小説や物語にも通じる真理だ。この部分の日本語訳にも、並々ならぬ心づかいが見て取れる。

ergreifend は、動詞 ergreifen「つかむ」から派生した形容詞で、「心を打つ、感動的な」という意味だ。これがなぜ「悲痛な」と訳されているのか。それはおそらく、komisch (comic, funny の意味) との対比を意識してのことだろう。悲劇と喜劇に分かれる古典演劇の伝統までも踏まえて、訳語を選んでいくにちがいない。さらに、原文では二つの形容詞が Begebenheiten (incident) を修飾しているが、それを二つの名詞句に分けて「悲痛なできごとや、こっけいな事件」と訳している。このさりげない構造の変換によって、日本語として自然な流れが生まれている。

jenes nur gespielte Leben (逐語訳: those lives only played) は、直訳すれば「演じられているだけの人生」だが、日本の役者が好んで使う「芝居」という言葉が当てられている。「ただの芝居にすぎない舞台上の人生」とは、まるで名優の台詞のようではないか。sie liebten (they loved) は、この文脈で「愛する」と訳してはすわりが悪いし、「大好き」では軽々しい。「こよなく愛する」とすることで、文章にすんなり溶けこんでいる。

実に洗練された日本語訳だが、そのよさは英語版と比較すれば、さらにはっきりする。

Whenever they saw exciting or amusing incidents acted out on stage, they felt as if these makebelieve happenings were more real, in some mysterious way, than their own humdrum lives, and they loved to feast their eyes and ears on this kind of reality. (英語版 -ハートカフ版 J. Maxwell Brownjohn 訳 Puffin Books p.12)

exciting or amusing は誤訳とは言えないまでも、類義語を並べただけで、劇の一面しか伝えていない。makebelieve も「虚構」という意味では悪くないのだが、「偽り」という意味もあるので、嘘くささがつきまとう。

saw と feast their eyes and ears on は、原文からかなり飛躍している。lauschten と hinzuhorchen は、どちらも「よく聞く」といった意味で、日本語訳の「聞き入る」「耳をかたむける」がぴったりだ。ここには、「心の耳で真実を聞きとる」というニュアンスがある。それが feast their eyes and ears on では、うわべだけで楽しんでいる印象になってしまう。日本語訳のほうが、はるかに原文の本質にせまっていると言えるだろう。

物語の導入が終わると、それから「いく世紀もの時が流れ」た近代都市で、廃墟となった小さな円形劇場に、主人公の少女モモが登場する。浮浪児らしきモモを気づかって、町の人びとがいろいろと尋ねる。

「モモという名前だって言ったね？」

「うん。」

「いい名前だね。だがそういう名前は聞いたことがないな。だれにつけてもらったのかい？」

「じぶんでつけたの。」

「じぶんで？」

「うん。」

「じゃ、生まれたのはいつ？」

モモはしばらく考えてから、やっと返事をしました。

「わかんない。いくらまえのことを考えても、もうちゃんと生まれたあとのあたししか、思い出せないわ。」(p.16)

どんなに文章が上手でも、会話の訳が不自然だと興ざめするものだが、この本にかぎっては、そんな心配はない。どの台詞も、それぞれの人物の性格を反映しており、つくりこみすぎることもなく、ちょうどいい口調が用いられている。この場面でも、モモに視線を合わせてしゃべる親切な大人と、すなおに答えるモモの姿が目に見えよう。

最後のモモの台詞の原文は、とても訳しにくい。Soweit ich mich erinnern kann, war ich immer schon da. (英語直訳: As far as I can remember, I was always

already there.)「おぼえているかぎりでは、わたしはずっとそこにいた」では意味をなさない。sein da (be there) は、「この世に存在していた」というニュアンス。これを小さな女の子がしゃべっておかしくない台詞に直すのは難しい。

大島かおりは大胆に構文を変えて、「おぼえているかぎりでは」という堅苦しい表現を「いくらまえのことを考えても～しか思い出せない」としている。I was already there は「もうちゃんと生まれたあとのあたし」。できあがった訳文は、原文と表現のしかたこそ異なるが、表している内容は驚くほど正確に写しとっている。

「わかんない」は原文にない言葉だ。原文では、Soweit...の文で、「(いつ生まれたのか)わからない」ということを遠まわしに答えているだけだ。必ずしも補う必要はないかもしれないが、まず相手の質問に「わかんない」と答え、その理由として「いくらまえのことを～」と言わせているのはわかりやすいし、好感が持てる。

モモの率直な口調にはじまり、無口なおじいさんの素朴な口調、おしゃべりな若者の勢いづいた口調などが、生き生きと訳し出されていく。時間泥棒たちが大会議でそれぞれの主張を訴える場面での、堅い演説調も面白い。

「諸君、わが時間貯蓄銀行の繁栄は、われわれのすべてがひとしく心からねがうところであります。しかしながら、今回のできごとで動揺したり、ましてこれが破滅につながるのではないかと心配したりなどすることは、わたしにはまったく不必要なことと思われまふ。これはぜんぜんそのような事件ではありません。われわれすべてが知ってのとおり、わが時間金庫にはすでに歴大なたくわえがあり、今回こうむった損失のなん倍もの時間が失われたとしても、けっして深刻な危機とはならないのであります。たかがひとりぶんの人生の時間なぞ、われわれにとってなにほどでありましょうか！ まったく、とるに足りないではありませんか！ (p.180)

日本の国会演説を思わせる口調だ。しかも国会演説よりずっと明快でリズムがよい。「～であります」「～ではありませんか」といった語尾の工夫によって、たたみかけるような調子が出ている。さらに、Meine Herren (英語直訳: My gentlemen) を「みなさん」ではなく「諸君」、unser (our) を「私たちの」「われわれの」ではなく「わが」と訳すことで、しかつめらしい場の雰囲気を出している。

最後に、この物語でもっとも美しい、モモが時間の

みなもとを見る場面から。

この星の振子はいまゆっくりと池のへりに近づいてきました。するとそのくらい水面から、大きな花のつぼみがすうっとのびて出てきました。振子が近づくとつれて、つぼみはだんだんふくらみはじめ、やがてすっかり開いた花が水のおもてにうかびました。(p.215)

Als das Sternpendel sich nun langsam immer mehr dem Rande des Teiches naehrte, tauchte dort aus dem dunklen Wasser eine grosse Bluetenknospe auf. Je naeher das Pendel kam, desto weiter oeffnete sie sich, bis sie schliesslich voll erblueht auf dem Wasserspiegel lag. (p.161)

As the star-pendulum now slowly approached the edge of the pond more and more, there rose up out of the dark water a large blossom bud. The nearer the pendulum came, the further it opened itself, until it finally lay on the surface in full bloom. (英語直訳)

幻想的な場面にふさわしく、原文の詩的な文章が美しい日本語で再現されている。lag (lay) は意外と訳しにくい言葉だが、この文脈では「うかぶ」がいかにも合っている。auftauchen は「浮かび上がる」という意味だが、最後の「うかびました」との重複を避け、「すうっとのびて出てきました」と、視覚イメージをさらに鮮明にする表現をあてている。「水面」の重複を避け、「水のおもて」とひらがなで表現する奥ゆかしさも実にいい。

ちなみに英語版では、eine grosse Bluetenknospe (a large blossom bud) が an enormous waterlily bud と訳されている。水から出てきたから睡蓮とは、短絡的な発想だ。おかげで読者の想像はひどく狭められてしまう。おまけに Teiche (pond) が lake と訳されている。lake のほうが語感が美しいと思ったのかもしれないが、そんな広い水面の中心に浮かぶ花では、遠くて見えにくい。そこでバランスを取るためか grosse (large) が enormous になっていて、どうも情緒に欠ける。

結局どんな言語に訳すのでも、読み手である訳者のセンスにかかっているのが、よくわかる。

日本語の訳書だけを読んで名訳と思ったのは、間違いではなかった。『モモ』はエンデの豊かな世界と美しい日本語が同時に味わえる、ぜいたくな本なのだ。

(ドイツ語の表記は文字化けを防ぐため、ウムラウトを ae, oe, ue、エスツェットを ss で代用した。)

## 岸本佐知子訳『中二階』

ニコルソン・ベイカー作の翻訳書、『中二階』を読んだとき、アメリカにはおもしろい小説を書く人がいるものだと思います。会社勤めをする 25 歳の青年が昼休み、切れた靴ひもの換えを買って昼食を済ませ、中二階にあるオフィスに戻ってくる、それだけの話です。この本を読んでいて「それで、この先どうなるの」という気持ちは起こりません。だというのに退屈になることもありません。主人公の青年が真剣に理屈をこねくり回している、本当にそれだけの米国版徒然草。ありふれた日々の一コマを滑稽なほど生真面目に切り取った、風変わりな小説です。

原書はいたって平易な文章で書かれています。蒸気船の仕組みやドアノブの形状など、普通の生活で頻繁には用いない単語が散りばめられているものの、文章自体に気取りがなく、読みやすい英語で書かれています。日本の読者が読んでも、英語を母語とする読者とほぼ同程度に内容を理解することができます。ただ、同じように楽しめるかと聞かれると、即座に首を縦に振れないものがあります。

今回の作品には日用品にまつわる固有名詞が数多く登場します。この日用品というのが曲者で、米国人にお馴染みの商品であっても、日本人にはどこことなく特別な印象を与えるのです。米国人が「ああ、よくあるよね、こういうの」と思う日常も、日本人にはちょっと洒落た、非日常に感じられることがあります。日本のセブンイレブンでおでんを買うこととイギリスのマークス&スパンサーでチョコレートバーを買うのでは、同価値の行為であっても受ける印象が異なります。

原著を読んでいて、たとえ理解の深さが米国人と同じくらいであっても、受ける印象が違えば当然その本を楽しめる度合いは変わってきます。すぐにイメージを喚起できない事物をさもありふれた風景のように提案されると、こちらとしては妙に冷めた気持ちができるだけで、少しもおもしろくはないのです。外国生活が長い方ならいざ知らず、私が原書を読んだときに感じたのはそういう気持ちでした。

それが訳書の『中二階』を読むと、おもしろく感じられるから不思議です。思い切った意識で本の趣旨を変えているのだらうと疑いながら、原書と付き合わせてみました。ところが派手な意識をしている箇所はありません。この効果の原因はどうやら訳文の視点の置き方にあるようなのです。つまり訳書のものとのらえ方が原書とはまったく異なっているのです。原文が読者に共感を求めるような文章であるのに対し、訳文はアメリカの生活を外側から眺めたような描き方をしています。

日本文化圏にどっぷり浸かった私が原書を読むと、無理して欧米人の真似をしているような息苦しさや照れ臭さがあり、いまひとつ読書に集中できません。岸本訳『中二階』ではその意識の差を埋めるような訳文が並んでいます。読んでいて読者が背伸びをしなくてすむような雰囲気を作られているのです。文字を追う以外の労力が減る分、読む人間は読書に専念でき、内容を楽しむ余裕を持てるのです。

これに似た現象を世阿弥の『風姿花伝』、ものまねじょうじょう物學條々の中に見つけました。

物まねの品々、筆に盡くし難し。さりながら、この道の肝要なれば、その品々を、いかにもいかに嗜むべし。およそ、何事をも、残さず、よく似せんが本意なり。しかれども、また、事によりて、濃き、薄きを知るべし。(岩波文庫 p23、一部表記修正)

「もらすことなく、等価の意味を持つ訳を志すのが本意だが、ところどころで力具合を調節すべき」とは、まさに岸本訳『中二階』が体現している、ひとつの翻訳の理想形です。

このあと世阿弥は、ありのままの姿を映すだけでは「餘りに賤しくて、面白き所有るべからず」と述べています。翻訳の場合、すべてをむき出しにする訳文は賤しいというより雑多な印象を与えます。たしかにありのままの素直すぎる直訳であっても、誤訳さえなければ意味は通じます。しかし読者が楽しんで読む文章ではないのです。確かな手ごたえを感じさせない文章に魅力などないからです。

原書を読んだ際におもしろいと思えなかったのは目の前に差し出された生活に実感が湧かなかったからです。米国の日常生活にトリップした感覚を、私は持つことができませんでした。しかし、映画やテレビドラマを観るように、外国人の生活を外から眺めることの実感は持てます。だから外から眺めるような視点で訳された岸本訳『中二階』には手ごたえを感じ、おもしろいと思えるのです。

では、例を挙げて見ていきます。

昼食前に洗面所に立ち寄ることは午前中の仕事の一環であって、私に課された他のもろもろの雑務と同様、ひとつのルーティン・ワークなのだ。したがって、会社に何ら利益をもたらさないとはいえ、それは私の仕事の一部であり、昼休みの日光と歩道と自由意志の一時間とは一線を画すもの



だ。となると、会社は私の午前中三回、午後三回、計六回の洗面所行きに対して賃金を払っていることになる。(ニコルソン・ベイカー著岸本佐知子訳『中二階』白水 u ブックス p96)

.... ; the stop at the men's room was of a piece with the morning's work, a chore like the other business chores I was responsible for, and therefore, though it obviously didn't help the company to make more money, it was part of my job in a way that the full hour of sunlight and sidewalks and pure volition was not. What that meant was that my company was as a rule paying me to make six visits a day to the men's room three in the morning, and three in the afternoon .... (原書ペーパーバック版 p71、72)

前から忠実に訳しているにもかかわらず、訳文は話し手の意識を故意に分断して訳しています。思考の流れのままに続く原文に比べ、訳文はすっきりと明確に意味を提示しています。原文は辞書を引かずに読める簡単な英語で書かれています。むしろ文章構造から言えば訳文のほうが硬いくらいです。にもかかわらず読んでいて容易に風景を思い浮かべられるのは日本語に訳された『中二階』なのです。

その効果を引き出している理由のひとつは的確な訳語選択にあると思います。岸本訳『中二階』では、解釈に幅のある言葉にきちんと色がつけられ、明快に表現されています。例えば原文 1 行目の of a piece with を辞書で引くと「~と同じ内容/性格の」とあります。もしここを「午前中の仕事と同等の」などとすれば、途端に臨場感が消え、ざらついた印象を与えます。仕事場の適度な緊張感と公共性を発揮する日本語として、訳文の「一環である」という表現はこの雰囲気にとりまっています。

また原文 5 行目の in a way that の way は易しく思われがちな単語ですが、じつのところ誤解釈されることの多い、ひじょうに難しい単語です。わかった風な顔をしつつも、語釈しきれていない訳者はたいていこの言葉をかたっぱしから「方法」と訳していきます。すべてが間違いというわけではありませんが、「方法」一辺倒で訳していると、どうしても違和感の生じる場所が出てきます。「方法」という言葉の漠然とした包容力にすべてを委ね、他の解釈を試みる手間を惜しんだがゆえに、要領を得なかった訳文は多々あります。そういった違和感のある way は「状態」と解釈すると納得いくことがよくあります。この解釈はジーニアスにも第 9 義できちんと載っています。岸本訳ではここを「方法」ではなく「状態」と読み取った上で、助詞の「の」一言で訳しきっています。

of a piece with と way を見ただけでも、世阿弥の言う「濃き、薄き」を心得た訳文であることがわかります。ずっと頭に意味が浸透していく味わいは、意識という派手な一発芸に頼らない地道な積み重ねの上に、

たしかな英文読解力に裏付けられた職人技のさじ加減があって実現されているように思います。

次は会話文を例に見ていきたいと思います。

「いいや、取り寄せるのさ。UPS の空輸便でな。テキサスのインディアン職人に特別に作らせるんだ。アルパカと細手のツイードを縫い合わせて仕上げに防水スプレーをかけてある」  
「そいつはすごい」私は言った。アベラードとうまくやっていくコツは、仕事のこと以外で彼が言うことは何一つ真に受けない、ということだった。  
「それじゃ、お先に」(p134)

“I have them flown in UPS blue. An Indian guy in Texas makes them for me. He blends alpaca and some of the finer tweeds. Then he sprays it with Krylon.”

“Nice,” I said. The secret to working for Abe was realizing that nothing he said outside of company business, was serious or true. “Take it easy.” (p98)

トイレの入り口でばったり会った主人公と上司。主人公は話の流れから、上司も靴紐はコンビニで買うのかと軽い気持ちで尋ねます。上の引用部分はその後に続くシーンです。嫌みっつらしい上司アラベットのセリフは原文から離れることなく、人物像がぱっと浮かび上がる訳文になっています。それに答える青年のセリフもとても原文に素直な訳です。しかし最後の take it easy は日本語に引き寄せ、変化がつけられています。この状況下で「どうぞお気楽に」と、トイレに入るようながす部下はおそらく日本に存在しないでしょう。「それじゃ、お先に」という訳は原文とにらめっこしているだけでは、けっして浮かんでこない、場の雰囲気を濃縮した訳文です。

岸本訳『中二階』は翻訳姿勢を一貫させるべく「この状況で日本人なら何と言うか」を考えながら訳されていると言えます。姿勢がはっきりしていないのだとしたら、こういう訳は絶対に出てこないはずなのです。

岸本訳『中二階』はどこか世阿弥の能を思わせます。ひとつは前面に日本文化として君臨すべく存在していること。そしてもうひとつは異次元の世界を身近に感じさせる力を持っていることです。能が幻の世界をこの世に現すように、岸本訳『中二階』は遠く離れた外国の日常を日本人に伝えていきます。破綻のない、水晶玉のような訳文を、みなさまもぜひ一度ご耽読ください。

## 『二ホン語、話せますか?』(マーク・ピーターセン著、新潮社)

マーク・ピーターセンの日本語もたいしたものだが(この本は直接日本語で書かれた)、それ以上に、映画の読み方に感心した。例えば、オードリー・ヘップバーン主演、グレゴリー・ペック共演「ローマの休日」の次の解説を読んでほしい。(以下原文、私のコメントの順)

-----  
p82 (アン王女とジョーが「デキている」証拠を挙げる箇所)

次のカットで、ジョーの部屋の中が映し出される。着替えたばかりの彼女が真剣そうな顔をして、彼女がいる風呂場の閉まったドアの方へ目を向ける。続いて、風呂場の中、ジョーのパスローブを纏っているアンが鏡の前に立って、髪の毛を直している。彼女も真剣そうな顔をしている。これまでずいぶん子どもっぽい感じだった彼女に大人びた雰囲気がある。彼女は、優しいまなざしで一瞬ドアを見て、風呂場を出る。すると、待っていたジョーと目が合う。ふたりとも気恥ずかしい表情をする。そして、こんな会話が始まる。

ジョー：Everything ruined?(服は、だめになっちゃった?)

アン：No. They'll be dry in a minute.(いいえ、もうだいたい乾いているの)

このセリフもまさに「時間の経過」を示している。土手からは10分で楽にジョーの部屋に着くはずなのだが、びしょ濡れだった彼女の服が“*They'll be dry in a minute.*”という状態になるまで、どう考えても、2、3時間はかかるだろう。つまり、このセリフは、ふたりの時間はあったよ、ということを観客に教えてくれるわけだ(残念なことに、私の持っているビデオの日本語字幕では、このセリフは「ジョー：服は?/アン：乾けば大丈夫よ」と、違う意味に訳されていて、字幕だけで映画を理解しようとしている人にはこの場面の大事な暗示がなくなってしまう)。)

コメント：そう、この映画が「逆シンデレラ」の単なるおとぎ話ならば、かくも長い間名作の名をほしいままにはしていまい。ラブコメディと見えながら、少女が大人の女になってゆく人間形成物語の要素があればこそ、永らえてきているのだ。冒頭わがままな王女であったアンが、終わりの場面では凛とした王室の跡継ぎに変身している。これは一日の自由な見聞の時間があったからではない。女になったからこそである。川から二人が上がってジョーの部屋に入ったあと、その

アパートの大写しでまず時間の流れを象徴し(時間の流れは満ちてくる潮やそよぐ梢、長くなる影などでも表現される。いわゆるモンタージュ作法だが、危険を象徴するのに、かつては決まって鉄道の踏み切り場面が挿入されていたのを思い出す読者もいるのではないか)、それから上記の説明台詞(もうすぐ乾くわ)。そしてこのあと、二人がいかに自然に抱き合うシーンがあって、カット、台詞、行為の三つでまごうかたなく二人は関係したとっているのだ。

ここまでは私も読み込んでいたが、ピーターセンによれば、この映画の最初の方に、彼女が処女であることをわざわざ観客に明らかにする次のセリフがあるそうだ。

“This is very unusual. I've never been alone with a man before, even with my dress on. (Unbuttoning her blouse) With my dress off, it's most unusual. Huu! I don't seem to mind. Do you?”(これって変ね。服をつけていたって殿方とふたりだけになったことはありませんもの《ブラウスのボタンをはずす》。こんな風にしてるなんてほんとうにヘン。でも私って平気みたい。あなたは?)

なるほどね...

-----  
p17 (ブッシュ大統領の資質についての言及箇所)

そして今度の同時テロのことで、テレビカメラの前で即興で喋ることがだいぶ増えてきたので、やはり心配になる。私がアメリカに着いた日、大統領は、“a crusade to eradicate the evil of terrorism”(テロの邪悪を撲滅する戦闘)を宣言した。

コメント：このカッコのなかの「邪悪」は訳としてまずいのではないか。英語の evil は不可算名詞で抽象的な「邪悪なるもの」だが、前に the がつき、後から of 以下で限定されている。したがってもっと具体的なものに読み解かねばならない。ここは「テロというよこしまな行為」ということだろう。抽象名詞の具象化の訓練はかえって我々日本人のほうに気をつけてやっているのだから、いちいち原語を分析しないネイティブより敏感といえるかもしれない(東京へ行く、と東京に行く、の違いがいえるだろうか。日本語堪能な教養ある外国人なら「に」は場所、「へ」は方向とさっと答えるはず。外国語を習得する際の文法の重要性を象徴している)

p25 (外国人向けの日本語習得教科書の説明箇所)

テキストも優れており、頻繁に使われている日本語のレトリックが見事にまとめられていた。そして、そのレトリックを英語で直さず、日本語として直接理解できるように、わかりやすく説明されていた。たとえば、こんな具合だ。

<...**どころか**「...というのは適当ではない、そうではなく、もっと極端で...」という意味で、「どころか」につづく部分を強調する。

参考例文

A: 彼、かなりできるようですね。

B: かなり**どころか**先生よりうまいくらいですよ...

注: 「どころか」のあとに反対の意味の表現がくることもある。

A: 旅行どうでした。よかったですでしょう。

B: それ**が**、よかったです**どころか**、たいへんだったんです。車が故障して...>

**コメント:** やはり外国人も日本語を勉強するとき、理屈から入っている。文法や理屈は敷衍化できるものだから、どの言語の習得においても王道なのだろう。前回、訳例がおかしいのを説明するのに、「...はいうまでもなく」のあとにくる言葉を苦勞して自分でつくったが、こうした日本語教科書を種本にすればいいのがわかった。地道に日本語教材をつくっている方たちに敬意を表したい。

p38 (リンカーンの演説の文句について触れる箇所)

「英語との比較」の話ではないが、最近『丸谷オ一の日本語相談』(朝日新聞社)にも驚かされた部分があった。きっかけは、こんな「問い」である。「リンカーンの有名な言葉、『人民の、人民による、人民のための政治』ですが、『人民による、人民のための政治』だけで意味を尽くしていると思います。『人民の』には、どういう意味があるのですか。助詞『の』について詳しく説明してください」。この場合の「の」の曖昧さが指摘されて、鋭い質問だと思ったのだが、その答えに、こんなことが書かれていた。「government of the people, by the people, for the people は、『**人民を**、人民によって、人民のために**統治すること**』の意である」(イタリック・太字《元は傍点》は引用者=ピーターセン)。つまり、government of the people の of は、「所属」(例: a member of the team)や「所有」(例: a friend of mine)、「材料」(a ring of gold)等々を示すような of ではなく、「目的格関係」(例: the exchange of opinions=意見を交換すること)を示す of だ、と説明しているわけである。英語圏で 141 年以上も続いてきた常識的受け止め方が引っ繰り返される、リンカーンも

驚くにちがいない、突拍子もない文法的解釈だが、実は、そこでやっと筆者がいちばん指摘したかったと思われるポイントが浮上するのだ。つまり、現在の日本語では当たり前となっている「**歴史の研究**(=歴史を研究すること)」などのような表現に見られる「目的格」を示す「の」は、「**どうも昔はなかったらしい**」、英語の of の影響でそれが生じたのではないかと、というポイントである。

リンカーンの言葉について簡単に言えば、government (which is) of the people (and is) by the people (and is) for the people (ちなみに、中国ではこれは「**民有、民治、民享の政府**」と訳されているようだが)の of the people は、いわば、「**人民の合意の上で出来た**」や、「**人民の間から生まれた**」などのような意味を表している(下線は、私による)。リンカーンはこの言葉で「government=政治」を説明しているわけで、government に統治されているのは the birds でも the flowers でもなく the people だよと、わざわざ述べる必要も意図も、いうまでもなく、ない。

**コメント:** これは困った。というより途方にくれる。このリンカーンのゲティスバーグ演説に関して、日本の英文学界で定説となっているのは次のようなものだ。

「人民による、人民のための」--そこまでは問題はないが問題は、最後の「**人民の政府\***」the government of the people である。

終戦後、この言葉が日本でも流行するようになるのと一緒に、私なども英語をやっているせいか、幾度か質問を受けたのはこの最後の一句である。十人の九人までは、これを人民が立てる政府、人民が治める政府、人民政府、いいかえれば、「の」の of を第一格的意味にとっていて怪しまないのである。稀に、あれは、「人民を治める、支配する」意味だという人もありますが本当ですか、という人もいた。だが、それも実はこの解釈には不満なのであり、もちろん、そうじゃない、人民のつくる政府という意味なのでしょうと、半分以上は結論をつくっているのである。そこで私が、いや、人民を治めること、すなわちこの of は第四格的な of で、「人民を治める政府」の方が正しいでしょうといっても、まず例外なしに信用してくれなかった。市河三喜教授にいつかこの話をしたら、教授も同じ経験があるそうで、ただ私と違って教授ほどの権威になると、聞く者も一応は納得したらしい。

\*government は g が小文字なので「政治」ととるのが順当と思うが、ここでは触れない(柴田注)

上記は、戦後のいわゆる進歩的文化人であり、翻訳家としても大活躍した中野好夫の文（酸っぱい葡萄、1948）よりの引用である。これについては数年前に、青山学院の教授であり翻訳家としての実績もある飛田茂雄が、とうに解決済みの問題ではあるがとして、似たようなことを『英語青年』誌上に書いていた。それが、ピーターセンのような教養あるネイティブ・スピーカーに自信たっぷり「違う」と断定されると、日本人すべての英語力が否定されたような気になってしまう…。

ではネイティブのピーターセン様に恐れ入りましたとひれ伏せばよいかといえ、そうともいえない。中野はこの文の後のほうでこんな隠し玉を用意しているのである。

「人民による、人民のための、人民の政府」という言葉は、民主政治の客体と主体と目的とを、実にこの上の言い方がないほど簡潔に述べたものだと思う。幸い先日の『英語青年』誌を読んでいたら、一読者からの投書があり、この名句に対して、さる向うのある著者からの明快きわまる引用が載っていたから孫引きさせてもらう。問題の箇所だけをそのままに書くと、「人民の—とは、人民は治められなければならない。文明社会の秩序と安全と幸福とのために、人民の統治(人民を統治すること)がなければならない」というのである。

この問題はこれでもう疑問の余地はなからうと思う。…（下線、私）

こう識者の意見が割れると、解釈の許される範囲で文脈を読み、自分なりの理解をする、というしかなくなってくる。私はかつて自著（「翻訳家になる方法」青弓社）に次のごとく記したが、皆さんの判断はいかがだろうか。

「人民の人民による人民のための<政治>」というが、何かもどかしかった。

by 以下は言い換えた、と教えてくれたのは予備校の S 先生。「人民の政治、それ即ち人民による人民のための政治」

of は目的格関係だよ、と説いたのは大学の O 先生。「人民を、人民が、人民のために統治する」

リズムを合わせただけ、と断言したのは翻訳家の C 先生。「普及している訳でいいのだ」

翻訳は範を超えねば自由なのである。

-----  
p66（先々月号で取り上げた『英文解釈教室』の同じ箇所を、偶然言及している）

言うまでもなく、ひたすら減点ばかり気にする受験勉強の弊害も大きいだろう。たとえば、受験勉強用の「某英文解釈マニュアル」の冒頭の「例題」にはこんな和訳が付けられている。

「日常生活において、つまり手紙を書いたり、会話や政治演説をしたり、公式の通知を起草したりするときに、気をつけてたくみに言葉を使うことが、文学への関心の基礎となる。文学は、同様な**技巧と感受性が人間の生活**に対するもっとも深い**洞察を取り扱う**ところから生まれるのである。」（太字引用者=ピーターセン）

ももとの英語だって確かに面白くもなんともない文だが、すくなくとも訳文と違って、意味が自然に伝わってくる、わかりやすい文章ではある。そして、こうした些細な例にも、重大な現象が見られるのだ。具体的には、たとえば、ここでの「**人間の生活**」は、原文の「**the life of man**」(人生)の訳である。「人生」の意味とはだいぶ異なる「**人間の生活**」と訳されているのだが、「受験公式」の「**A of B**」=「**B の A**」だけは遵守している。これが、受験勉強独特の「意味軽視構文重視現象」である。

あるいは、これでも日本語かと思われる「**技巧と感受性が…洞察を取り扱う**」の S V O も同じだ。「感受性」が何かを「取り扱う」という日本語は勿論ないが、確かに原文はそのような形になってはいる。ただし、その原文を読むと、「文章力と感受性によって、作家は、自分で見抜いた「**人生の真実**」をうまく表現できる」と言っていることが素直に伝わってくる。これに対して、減点を気にして無理に作られた訳文は、「こなれ具合が悪い」だけではなく、意味すらよくわからないものになってしまっている。では、せめて大学に無事合格した後は、そうした訳し方を止めればよい、ということになるが、世の中はそう甘いものではないらしい。翻訳者という立場になってすら、原文に何が書かれているか自信を持って理解できない場合、たちまち受験生の気分に戻って、無理矢理その場しのぎの「こなれていない」訳をしておまかしているようなのである。

**コメント**：ピーターセンの論旨はわかったし、教養ありしかも日本語も堪能な英語のネイティブ・スピーカーであるピーターセンに楯突くつもりは毛頭ない。だが、「ネイティブならこう感じるに決まっている」はわかったが、どうしてそう感じるのか論理的分析をしてくれなくては困る。仕方ないから自分で考えてみた。以下は私の類推である、異論あればぜひ投稿していただきたい。

life は基本の意味では、state of living、つまり state of being alive as a human being; an individual person's existence (おおまかな訳語で「人生」)

それが狭義で human experiences、つまり a person's experiences と typical experiences に分かれる (おおまかな訳語で「生活」)

特にその意味を限定する言葉が入っていない限り、の意味となる (cf. busy life 「多忙な生活」、married life 「結婚生活」) ことが多い

「the life of 名詞」は、名詞の位 (man 人間 > soldier 兵隊) が高ければ、低ければ となる。

そこで、the life of man は「(卑近なる)人の日常生活」にはならず、「人間が送ってゆく暮らしの状態」即ち「人生」になる。the life of soldier なら「兵士の生活」となる

また日本語と英語の言葉の誤差という観点からも考えねばならない。life という言葉それ自体は一般的には「生きて(何かの活動をしながら)存在すること、またはその時間」を指し、それ以外の場合については限定的に使われることを示すキーワードが入るのが英語の原則で、それに対して日本語訳を考える場合には、「人生」も「生活」も、もとにある「存在して活動する」という語義を十分伝えられない場合が多いため、状況に応じて訳語を変える必要がでてくるし、またどちらを使っても受ける感じが変わらないこともある。

前々回示した訳文例を改めて示せば、  
伊藤訳：「文学は、同様な技巧と感受性が人間の生活に対するもっと深い洞察を取り扱うところから生まれるのである」

修正訳：「文学は、こうした技巧と感受性を以って人間の生活をより深く洞察しようとするところから生まれるのである」

伊藤訳と修正訳、同じ「人間の生活」との訳語を使っても、前者は生活臭く、後者は人生全般っぽく(「人生」とリバーシブルになりそうに)感じられはしないだろうか。これが、語感というもので、この

原語にはこの訳語と一概に決められない所以なのだ。

むかし、グロートゥス神父の『誤訳』(三省堂)で誤訳として指摘された訳文を、当時新鋭の作家であった丸谷オー(国学院で英文学助教授の経歴あり)が擁護し、いわゆるマルチ・リンギストの欠点が如実に現れた誤理解だと、激しく反論していたのも確か、こういった語感を読み取れるかどうかの点であったかと思う。「人民の…」も含め、大人丸谷の意見を改めて聞いてみたいものである。

p155 (あとがき部分で中学英語教科書に触れて)

しかし、英語の誤った使い方や、話のつまらなさなどはともかくとして、一通り見て受けるもう一つの印象は、とにかく、学習的には内容がずいぶん薄いという事実だ。「ゆとり教育」の結果なのだろうが、真剣に学習しようとするれば、2ヶ月くらいで楽にできるはずの内容が、一学年かけてたらたらと紹介されているのである。また、簡単な会話が中心となり、reading の練習は際立って少ない。肝心の(かつて日本人は、これだけは得意だと自信を持っていたはずの)文法も、ほとんど姿を消している。いわば、「英語ごっこ」といった感じである。

コメント：精読こそ英語学習の礎と考えている私には、うれしい援軍だが、もっとはっきり「ペラペラしゃべるための英語なぞ何にもならないよ」と書いてほしかった。『英語を子どもに教えるな』(市川力、中公新書ラクレ)では、アメリカの日本人学校で12年間教鞭をとった教師が、親が子どもに抱くバイリンガル幻想をみごとにうちくだしているが、その流れを作るのに協力してほしいところだ。

「日本語はきらいだ！」と辞書を投げ飛ばしたとき、思わず日本語で叫んでいたというほどのめりこんだ経験のあるピーターセンなればこそ、生半可なことでは言語の習得はできないことを説得力をもって語れるものと思う。

**株式会社アイディ**

**柴田耕太郎 主宰 『英文教室』**

『翻訳力練成テキストブック』の著者が自ら講じる  
読むための英語のすべてを伝える講座です

事務担当 前川 / 岡里

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : [educa@id-corp.co.jp](mailto:educa@id-corp.co.jp)

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル